行事などで関係構築した多職種で運営

袖団カフェ（習志野市）

JR総武線津田沼駅からバスで約15分のUR袖ケ浦団地。その集会所で月1回「袖団カフェ」は行われている。第3日曜日の10時から12時30分までだ。

集会所のドアを開けると、4つのグループに分かれてテーブルが配置され、その周りを約10人ずつの老若男女が囲み、お茶とお菓子をつまみながらおしゃべりをしていた。

この日は途中から参加者が増え、5グループとなった。

有限会社「ウェルフェア」代表で、グループホームやデイサービス施設を経営する田邉恒一さん(43)は「毎回、運営ボランティアを含めて3、40人が参加しています」と話す。

各テーブルを囲んでいる人は介護者、地域のお年寄り、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、市職員、地域包括職員、ケアマネ、介護職、民生委員、高齢者相談員などさまざまの職種だ。

多職種の人が参加しているのは、3年前から市内で行っている「認知症メモリーウオーク」や認知症サポーター養成講座などの行事で、顔の見える関係になっていることが大きいという。

協賛している地元医師会から医師が毎回1人派遣されているが、この日はほかに2人の医師が任意で参加していた。

認知症の人も3人来ていた。軽度認知症の男性は医師に「かかりつけの先生に症状の進行が治まっていると言われたが、治ることもあるんでしょう」などと聞いていたが、医師は首を横に振っていた。

また、別のテーブルでは「夫がアルコール依存症で認知症になったが、薬の量を増やしたほうがいいか」と、別の医師にセカンドオピニオンを求めていた。カフェでの医療や介護の相談が、介護サービスの導入や見直しにつながることもあるという。

認知症や介護について、隣の人などと情報交換

途中、体操して気分転換

認知症メモリーウオークの様子

▼田邉恒一さんの話

「当初、カフェを開くことを迷っていたが、認知症カフェ『かさね』に見学に行った際、代表の高橋さんに『やればいいじゃん』と励まされ、この一言が始めるきっかけとなりました。市の認知症カフェ運営業務委託法人に選ばれ、1月から委託料が入りますが、初心を忘れず、運営を続けていきたい。月1回だと来られない人も多い。いずれ別の地区でも始めたい」